

2025

HARVARD-YENCHING  
INSTITUTE WORKING  
PAPER SERIES

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本における  
アリスの冒険

**AUTOETHNOGRAPHIC FICTION: ALICE'S  
ADVENTURES IN MULTILINGUAL JAPAN**

Aoyama Waka | The University of Tokyo

## 自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険 Autoethnographic Fiction: Alice's Adventures in Multilingual Japan

Waka Aoyama (The University of Tokyo)

**Abstract:** These essays are the first drafts of the chapters for an autoethnographic fiction titled *Fustuno Maruchiringaru (An Ordinary Multilingual)*, scheduled for publication in 2027. From June 2024 to February 2027, approximately 20 chapters, including a prologue and an epilogue, are planned to be written in Japanese. The work is based on the author's personal experiences and follows a character named Alice, born and raised in Japan, whose first language is Japanese. The story portrays Alice's everyday use of multiple languages. While Japan is often misunderstood as a "monolingual society," the work shows that it is, in fact, a "multilingual society," and it challenges the concepts of "ordinary" and "equality" in postwar Japan from the perspective of language use. Themes such as diversity, coexistence, colonial and wartime aggression, and the power of language are explored, with a narrative of homeland loss and regeneration. The work encourages critical reflection on our unawareness of the privilege of "Japanese" and "English" and the linguistic hierarchies we live with, aiming to bring out the reader's own "language stories." Grounded in critical metalinguistic awareness, it seeks to explore the possibilities of creating a socially just world. In order to prepare for the publication of a future English edition and to explore the impossibility of translation, English translations of all chapters are included.

**Keywords:** Multilingual Japan, Language Use, Being Ordinary/Normal and Egalitarianism, Colonial and Wartime Aggression, Critical Metalinguistic Awareness

**要約：**これらのエッセイは、2027 年度に出版予定の『ふつうのマルチリンガル』という自伝的民族誌的フィクション作品の各章の初稿である。2024 年 6 月から 2027 年 2 月にかけて、プロローグ、エピローグを含む約 20 章が日本語で執筆される予定である。本作では、著者自身の経験に基づき、日本生まれ日本育ち、母語が「日本語」であるアリスという人物が、日常的に多言語を使う様子を描く。日本が「モノリンガル社会」と誤解されがちである一方、実際には「マルチリンガル社会」であることを示し、戦後日本における「ふつう」や「平等主義」を言語使用の観点から問い直す。多様性、共生、歴史的加害性、言葉の力をテーマに、故郷喪失と再生を描く。とくに「日本語」や「英語」の特権性や言語的ヒエラルキーに無自覚なわたしたちに対する批判的反省を促し、読者自身の「言語の物語」を引き出すことを目指す。批判的メタ言語意識を軸に、社会的公正な世界への可能性を探る一冊である。将来の英語版の出版に備えるために、また翻訳不可能性を探るために、全章の英訳を付す。

**キーワード：**マルチリンガル社会としての日本、言語使用、ふつうと平等主義、歴史的加害性、批判的メタ言語意識

# 自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険

東京大学東洋文化研究所

青山和佳

## 3 藤沢 Fujisawa 森の幼稚園

### 海辺に暮らすドラゴン

わたしが五歳だったとき、大きな茶色のカップで搾りたてのミルクを飲んでいて。

七号館（ななごうかん）という古めかしい大きくて木でできたおうちに引っ越した。藤沢（ふじさわ）にある大学のなかの奥のほうにある校舎のひとつで、日中はたくさんの人がいて、白衣を着ていたり、つなぎを着ていたりして、いそがしそうに動き回っていた。校舎のそとには、フェンスで囲まれた広い場所があり、ヤギやヒツジやアヒルやニワトリや七面鳥が住んでいて、わたしと弟のかっこの遊び相手になってくれた。じゃり道をすこし歩いていくと、白黒の乳牛がまとまって住んでいる場所もあった。夕方になると、ガラス瓶に詰められたミルクをもらいにいく。日が暮れると人の姿がなくなり、動物たちも静まって、かたずみに暮らしてうちの家族だけの時間がおとずれる。

夜の八時、あかりを豆電気にして、二段ベッドの上の段に横になると、天井の木目がゆるやかにうねりだし、その流れのなかに溶けこみながら、半分はこちら、半分はあちらの世界にたましいをただよわせていると、ときどき、赤い三角ぼうしを頭にちょこんと載せている緑色のドラゴンが浮かんでくることがあった。名前はパフ。からだと同じくらい長い、とても太い尻尾をもっていて、そこにわたしは乗せてもらうことができる。パフには大きな翼があるのに、わたしたちは空を飛ぶことはなくて、海のそばにたたずんでいるか、海のなかをパフが漕ぐボートでどこかに向かって進んでいた。街が浮かんだり、帆船が浮かんだり、星空が浮かんだりする。そうしてわたしは眠りにつく。

朝になって絵本を開くと、パフはそこに住んでいた。絵本に付いているレコードをおかあさんがかけてくれる。Puff the Magic Dragon. 赤い三角ぼうしに見えたのは、パフの角だった。パフのともだちは、わたしではなく、Little Jackie Paper. パフは秋の霧に包まれた Land of Honah-Lee と呼ばれる場所に住んでいて、Jackie はそこによく遊びに行くのだけれど、あまりに Puff のことが好きなので、よく贈り物をもっていく。たとえば、strings and sealing-wax. なんだか不思議な響き。何のことかわからない。絵本に描かれ

ていない。だから、わたしは自由に想像する。Sealing だから、sea かな、海から採れるなにか素敵なものなのかな。わたしが知らない宝物があるのかな。

「東京こどもクラブ・英語で歌う会」から毎月一冊の絵本と一枚のレコードが送られてくることが、幼い子どもだったわたしは理解していなかった。おかあさんが買っていたことも知らなかった。おかあさんは英語ができないので、その絵本を読んでもくれたり、いっしょに歌ってくれたりすることは一度もなかった。おとうさんは「おしごと」でお家にいなかったし、あっこちゃんは結婚してほかのお家に行ってしまった。そのうち、ひとりでレコードをかけることを覚えて、ひとりで絵本を開いて、あきるまでその世界に浸るようになった。ヒラリーちゃんとおかあさん<sup>1</sup>が歌う歌を聴き、ヒラリーちゃんに続いて歌詞をリピートし、さいごはひとりで歌う、くりかえして歌う、踊りながら歌う。

## 書くことへの爆発

波打ちながらぐるぐる回るレコードの広い海をふわふわと泳ぎながら、わたしは Brother John の鐘になり、Twinkle Twinkle Little Star の星になり、Ten Little Indians<sup>2</sup>の少年になり、London Bridge の橋になり、The Muffin Man のマフィンになり、The Little Skunk のスカunk になり、Greensleeves のおねえさんになり、Row Row Row Your Boat のボートを漕ぐ少女になり、知らないうちに、わたし自身もぐるぐる回転しながら大きな声で歌を歌ったり、物語のセリフを繰り返したりするようになっていた。そのうちに背中に羽根が生えてきて、パタパタしてみると、ふんわりと浮かぶことができる。そんなわたしの様子をおかあさんが心配して、幼稚園に通うことになった。

幼稚園は森のなかにあった。毎朝、ぶどうの植物がぐるぐる巻きついている飾りのついた門をくぐり、三角やねの園舎のなかに入り、三つある広いお部屋のうちのはじっこのお部屋に入り、お気に入りのすみっこにぺたんと座って、「おしごと」<sup>3</sup>にとりくむ。こ

---

<sup>1</sup> 歌を指導するのはカナダのオペラ歌手ファイアストン夫人で、ヒラリーちゃんはその娘。レコードにはこのふたりの自然な会話もたくさん入っている。絵本のテキストはアメリカ合衆国、イエール大学教授（当時）で文学研究者、批評家のハロルド・ブルーム氏による。ブルーム氏の母語はイディッシュ語。

<sup>2</sup> 英語圏で親しまれている民謡でマザーグースのひとつとして知られているが、初期のバージョンには人種差別的な表現や残酷で冷笑的な表現が含まれている。  
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/テン・リトル・インディアンズ>、2024.07.25 最終アクセス)

<sup>3</sup> モンテッソーリ教育では、子どもの活動のことを「作業」、あるいは「お仕事」と言う。それは子どもが自分を成長・発達させるためにおこなうことであり、暇つぶしなどを含む

こは日本語の世界だったけれど、わたしがあまりにも英語の文字にこだわっているのをみて、わたしのために英語の「おしごと」をつくってくれた。小さなブロックみたいなもので、それぞれの面にアルファベットが書かれていて、ブロックを回して文字を合わせると単語をつくることができたり、色とりどりの文字のブロックを、絵本にある文字を見ながらならべかえると文章をつくることができたりする。

そのうち、わたしは先生に紙と鉛筆をねだって、ブロックでつくった単語や文章を見たり、絵本のなかの活字を見たりしながら、手をつかって文字を書くようになっていった。写真のようにきっちりと文字が写しとれているように感じると、わあ、アルファベットの人たちがここに並んでいる、すごいすごいと、すごくうれしくなり、ますますその森にのめりこみ、森のなかでたくさんの人たちと輪になって、いつまでもダンスするようになった。わたしのなかで何かが爆発していた。いくらでもお星さまが生まれてくる。星の野原をかけめぐる。あるとき、わたしは、ついに何も写さずに文章を書いた。I like to read. 先生が気づいて、わたしと一緒に読んでくれた。うんうん、I like to read なのね、うれしいね。We are so happy!

外遊びの時間になると、お砂場でひたすら泥だんごをつくっていた。小川のせせらぎと小鳥のさえずりと、木の葉っぱのあいだからこぼれ落ちるお日さまの光がちょっとずつ地面に差し込んでつくる小さな丸い点々にふんわりと包まれて、おだんごをまるめたり、かわかしたり、みがいたりして、せっせと地球をつくって、自分だけの冒険のお話をつくっていた。ほかのお友だちといっしょにすごすことはあまりなかったけれど、お弁当を食べるときはテーブルを分かち合ったし、ときには「お泊まり保育」でいっしょに幼稚園に泊まることもあった。クリスマスになると、イエスさまがどんなふうにも生まれたかをみんなで話してお話するお芝居をやって、マリアおかあさんやヨゼフおとうさんの役をやる子もいたけれど、わたしは羊さんだった。

## 用務員宿舎のまわり

七号館から歩いてすぐの実験林のなかにある用務員宿舎に、おじいちゃんとおばあちゃんも住み込んでいたので、おかあさんに「外で遊んできなさい」と言われたら、わたしと弟はそこへでかけていった。たいていの植物は名札をつけていて、三つずつ名前が書かれていた。ひとつは日本語で、ひとつは英語で、もうひとつは英語のようでは英語ではないようだった。おとうさんにきいてみた。それは、お花や木にとっての特別な名前だ、世界のどこでも同じ名前を使うためのもので、みんなが同じ植物のことを話すと

---

「遊び」と区別するためである（佐々木信一郎.2021.『発達障害児のためのモンテッソーリ教育』講談社、p.15）。

きにわかりやすくするためのものなのだよ、ラテン語という言葉で書かれていて、たとえばシロツメクサというお花は「トリフォリウム・レペンス」(*Trifolium repens*) と言うよ。Everything has two or more names..

おじいちゃんのリヤカーに乗せてもらって、林のなかをぐるぐる探検して、おじいちゃんに教えられて、桑の実とか、ビワとか、イチジクとかを、木からもいで食べていた。わたしが好きだったのは、ちょっと大きなナシみたいで、黄緑だったり黄色だったりして、皮がつるつるしているカリン (Chinese quince. *Pseudocydonia sinensis*)。お花みたいに甘い香りがするのにな、とてもかたくて、そのままでは食べられないから、両手で包むようにもってそこに顔をうずめて匂いだけを楽しんでいると、おじいちゃんがとつぜん、ダダッポッポー、ダダッポッポー、と鳥の鳴き声のまねをしはじめるので、びっくりしてカリンの実を地面に落としてしまうことがよくあった。ついてきた猫がそれにおどろいて駆けて逃げていく。

おばあちゃんは、ついに勉強する時間ができたので、調理師の免許をとって、学生食堂で働くようになった。わたしと弟は、ときどきおばあちゃんもって帰ってくるオレンジ色のスパゲッティやちょっとしんなりした白身の魚フライをお昼ごはんを食べることがあった。銀色の髪に白い三角巾をかぶり、かっぱう着をつけたおばあちゃんは、このころから、ひとりで遠くにでかけて、LOOK というツアーに参加して、「世界」を旅してまわるようになった。出発する前にはかならず地球儀をもってきて話をしてくれて、「おみやげ」は何がよいかきいてくれたけれど、「おみやげ」というものが何であるかをよくわかっていなかったのだから、「宝物がいい、宝物を見つけてきて！」とばかりねだっていた。

オーストラリアに行ったときは、カンガルーとコアラのぬいぐるみを持って帰ってきてくれた。カンガルーのおしりに付いているネジをまくと、なかに入っているオルゴールが鳴って、ワルチングマチルダという曲を聴くことができたので、そのリズムにつられてカンガルーを抱いたままマーチすることをくりかえして遊ぶことが好きになった。たくさんの絵葉書のなかには、大きなお山のように見える、とても大きな赤い岩があって、見つめていると、悲しい気持ちが湧いてくる、何かに怒っているような。そこに住んでいたひとたちにひどくつらいことがあったのかもしれない。そういう気持ちは、ブラジルから持ち帰ってきてくれた、モルフォ蝶 (おとうさんが教えてくれた) の鮮やかな青色の翅を見つめているときにも湧いてくるものだった。

## モルフォ蝶は語る

わたしたちは、遠くまで飛ばない。

大きな森に住んでいて、  
木の上のほうや木のあいだを飛び回っている。

わたしたちは、遠くまで飛ばない。  
森のはずれ、畑、川のそばに行って、  
パトロールしてから、やがて森に戻ってくる。

わたしたちは、遠くまで飛ばない。  
赤ちゃんのとき、木の葉っぱを食べて大きくなって、  
おとなになったら、腐った果実や動物の死骸の汁を吸う。

わたしたちは、青くみえるだけで青くない。  
翅の上に小さなうろこがあってね、  
そのうろこが光を跳ね返して小さな魔法をかけてくれる。

わたしたちは、青くない。  
腐ったグアバの汁を吸うとき、地面に舞い降りて、  
翅を閉じれば茶色っぽい蝶になってよく見えなくなる。

わたしたちは、青い。  
子どもに捕まえられて、そこらにある板に釘で、  
打ち付けられて標本にされるとき、翅は青く光っている。

わたしたちは、遠くまで飛ばない。  
わたしたちが死ぬと、  
とても小さな生物たちが体を食べて小さくしてくれる。

わたしたちは、遠くまで飛ばない。  
わたしたちが死ぬと、  
アリやハエが体を食べて栄養にしてくれる。

わたしたちは、遠くまで飛ばない。  
分解された体の小さな部分は土に戻って、  
その成分は、新しい生命を育てる手伝いをするだろう。

海を渡ったさきにいる愛おしい仲間たちよ、

あなたたちの体がいつかどこかに葬られるまで、  
小さき子どもたちにその輝ける翅をもって語りかけよ。

## ルースとブルース

Unya、もう一回、言わせてね。  
オーケー、déjame decirlo otra vez<sup>4</sup>。

わたしが五歳だったとき、大きな茶色のカップで搾りたてのミルクを飲んでいて。  
Pag-lima ka tuig ko, nag-inom ko ug bag-ong gatas gikan sa dakong brown nga tasa.

七号館のかたすみにあるわが家には、おとうさんのお友だちの「アメリカ人」がよく遊びに来てくれた。その人たちは、「ミッシヨナリー」だったり、「リサーチャー」だったり、男のひとばかりだったりしたけれど、ときどきカップルでくる人たちもいた。日本語はすこしできる人もいれば、まったくわからない人もいたけれど、英語はどのひともだいたい同じようにしゃべっていて、それは「セサミストリート」の世界のようであり、「東京子どもクラブ」のレコードの世界のようであり、幼稚園でわたしの書く文字を読みあげてくれる外国育ちの先生の世界のようであり、その人たちに会うのは初めてなのに、その言葉のさえずりに、なんだか、あったかい気持ちになる。

おとうさんは楽しそうに英語でおしゃべりしていて、おかあさんは英語ができないから、お料理や飲み物をだしたりしながら、すこし気まずそうに、でも、ニコニコしながら、みんなの中に、からだ半分だけ、入ったり出たりしていた。おかあさんから、子どもはおとなのおしゃべりに入ってはいけないと言い聞かされていたので、呼ばれないかぎり、居間のとなりの子ども部屋でおとなしくしていようとしているのに、おとうさんやおとうさんのお友だちが、アリス、こっちにおいで、はずかしがらないで、お歌を歌おうか、お歌は歌えるの、と声をかけてくるので、もじもじしながらみんなの中に入って、Puff the Magic Dragon や You Are My Sunshine を歌うと、みんなもいっしょに歌ってくれた。とてもどきどきした。

「ミッシヨナリー」のなかには、「リサーチャー」でもあるひとがいて、ブルースはそのひとりだった。ハワイの大学で、植物や土のことをたくさん勉強していると教えてくれた。どうやって植物を上手に育てるのかとか、食べ物を安全に育てる方法とかを学んでいて、ハワイだけではなくて、ほかの暖かい場所でも役に立つことを教えていて、み

---

<sup>4</sup> スペイン語。



んなが元気で健康に暮らせるように手助けしているから、ぼくはカリフォルニアから来たけれど、フィリピンや「沖縄」から来た学生たちもいっしょに勉強しているの。それで、ぼくには、フィリピンから来たルースという名前のガールフレンドがいて、いま大学が休みだから故郷のセブ(Cebu)に帰っていて、このあいだ、ぼくもセブに行って、ルースの家に泊まってきたところなの。

フィリピンはどこにあるの？ 地球儀をもっていくと、ああ、ここが地球だよ、ここはアメリカのカリフォルニアという場所だよ、地球の西のほうにあるよ、それで、ここがハワイ、カリフォルニアから船や飛行機で海を渡るとここに着くよ、ハワイはカリフォルニアの左のほう、つまり西のほうにあって、海の中にあるよ。それで、ここが日本だよ、日本はカリフォルニアの反対側、つまり地球の東のほうにあるの。それから、ここにある小さな島たちが「沖縄」だよ、日本のいちばん南のほうにあるの。そして、もっと南にいて、ここが、フィリピン、とてもたくさんの島があって、ルースの故郷のセブは、このまんなかあたりの島のことなの。

わたしは、ちょっとわからなくなってしまった。

日本は、地球の、東のほうにあるの？ とブルースに聞き返すと、そうだよ、ほら、こうしてアメリカのメインランドから見ると、地球儀のずっと右のほう、つまり東のほうにあるでしょう、わかるかな？

ブルースは、フィリピンのおみやげです、ルースに紹介されたお店で買いました、この貝は古い建物の窓に使われていることもあって、とても美しかったです、と言って、カピス貝(Capiz shell, おとうさんが windowpane oyster, *Placuna placenta* という名前を調べて教えてくれた) のシャンデリアをうちに置いていった。とても薄くて軽い丸い紙のようになった貝が何枚も重ねられていて、その表面はすべすべしていて白いのだけれど、いろいろな白が混じっている雲のかけらのようで、ふわふわと吸い込まれるような気持ちになっていく。えんがわの物干し竿にかけられたシャンデリアがゆらめきながら、お日さまの光をはねかえし、きれいな輝きを放っているのを、わたしはいつまでも見つめていた。

## **Autoethnographic Fiction: Alice's Adventures in Multilingual Japan**

**Institute for Advanced Culture on Asia, The University of Tokyo**

**Waka Aoyama**

### **3 Fujisawa: Forest Kindergarten**

#### **A dragon living by the sea**

When I was five years old, I was drinking freshly squeezed milk from a big brown cup.

My family moved into an old, large, wooden house called Nanagokan (七号館, Building Number Seven). It was one of the school buildings at the back of the university in Fujisawa. During the day, there were many people, some in white coats and some in overalls, busily going about their work. Outside the school building was a large fenced-off area where goats, sheep, ducks, chickens, and turkeys lived and played with my brother and me. A short walk down a dirt road led to a place where black-and-white dairy cows lived together. In the late afternoon, my brother and I would go there to get milk in glass bottles. At dusk, when the sun goes down, the people disappear and the animals quiet down. In a quiet corner of the farm, time slows down—just for our family.

At eight o'clock at night, when I lay down on the top bunk bed with the nightlight set, the grain of the ceiling gently undulating, blending into the flow, my mind wandering half this world and half that world, sometimes a green dragon with a red triangle on its head would float by. I sometimes saw a green dragon with a red triangular cap on its head. His name was Puff. He had a very thick tail, as long as his body, on which I could be carried. Puff had big wings, but we never flew. We either stood by the sea or went somewhere in the sea in a boat rowed by Puff. A city would float by, a sailboat would float by, or the stars would float by. Then I fall asleep.

In the morning, when I opened the picture book, Puff was living there. My mom plays the record that comes with the picture book, Puff the Magic Dragon. What looked like a red triangle was Puff's horn. Puff's friend was not me, but Little Jackie Paper. Puff lived in a place called the Land of Honah-Lee, surrounded by autumn fog, and Jackie often went there to play, but she liked Puff so much that he often brought him gifts. For example, strings and sealing-wax. It sounds kind of strange. I don't know what it is, it's not depicted in the picture book. I wonder if it's "sealing", it may be something wonderful from the sea, or something I don't know. Is there a treasure I don't know about?

As a young child, I did not understand that the Tokyo Kodomo Club (Tokyo Children's Club)-English Singing Club sent me a picture book and a record every month. I did not even know that my mother had bought them. Since my mother did not speak English, she never read the book to me or sang along with me. My father was away on "work," and Akko-chan got married and went to another family. Sooner or later, I learned to play records by myself, open picture books by myself, and immerse myself in the world until I got bored. I would listen to Hilary and her mother<sup>5</sup> sing, repeats the lyrics after Hilary, and sings the last song by myself, repeats it over and over, and dances while singing.

### Explosion into Writing

As I fluffed and swam across the wide ocean of records circling in waves, I became the bell in *Brother John*, the star in *Twinkle Twinkle Little Star*, the boy in *Ten Little Indians*<sup>6</sup>, the bridge in *London Bridge*, the muffin in *The Muffin Man*, the skunk in *The Little Skunk*, the lady in *Greensleeves*, the girl rowing the boat in *Row, Row, Row Your Boat*... Before I knew it, I was spinning in circles and singing loudly—repeating lines from stories as I twirled around. Eventually, I grew wings on my back, and when I flapped them, I could float softly. My mother, concerned about my condition, decided to send me to kindergarten.

The kindergarten was nestled in the forest. Every morning, I would walk through a gate adorned with grapevines curling around it, step into the triangular-roofed school building, and head to the room in the corner—one of three large rooms. There, I'd plop down in my favorite little nook and begin my "work"<sup>7</sup>. This was a world of Japanese, but when they saw how fascinated I was with English letters, they created special English "work" just for me. It involved small block-like objects, each side marked with a different letter of the alphabet. I could spin the blocks to form

---

<sup>5</sup> The singer is Mrs. Firestone, a Canadian opera singer, and Hilary is her daughter. The record includes many natural conversations between the two. The text of the picture book was written by Harold Bloom, then professor at Yale University in the United States, and a literary scholar and critic. Bloom's native language is Yiddish.

<sup>6</sup> A popular folk song in the English-speaking world and known as one of the Mother Goose, early versions contain racist, cruel, and cynical expressions. ([https://en.wikipedia.org/wiki/Ten\\_Little\\_Indians](https://en.wikipedia.org/wiki/Ten_Little_Indians) , last accessed 2025.04.24)

<sup>7</sup> In Montessori education, children's activities are called "work" or "job. This is to distinguish it from "play," which includes passing the time, and is something that the child does for his or her own growth and development (Sasaki, Shinichiro. 2021. "Montessori Education for Children with Developmental Disabilities," Kodansha, p.15 [佐々木信一郎.2021. 『発達障害児のためのモンテッソーリ教育』 講談社, p.15]).

words, or rearrange the colorful letter blocks to match the words in picture books and build sentences of my own.

Eventually, I asked my teacher for a piece of paper and a pencil and began to write by hand, looking at the words and sentences I had made with the blocks and at the printed words in the picture books. When I felt the letters were perfectly captured on the page, I was overjoyed to see all these alphabet “people” lined up in a row, and I became more and more absorbed in the forest, dancing endlessly in a circle with many others among the trees. Something was exploding inside me. I was creating as many stars as I could. I was traveling through fields of stars. One day, I finally wrote a sentence without copying anything: “I lik to red.” My teacher noticed and read it with me. We were so happy!

When it was time to go outside to play, I would make mud dumplings in the sandbox. Softly enveloped by the babbling of the stream, the chirping of birds, and the little round dots of sunlight that fell through the leaves, I would roll, wriggle, and brush the dumplings to make “the earth” and create my own adventure stories. Although I didn’t spend much time with other children, we shared the table when we ate lunch, and sometimes we stayed together at the kindergarten for “overnight care.” When Christmas came, we performed a play where everyone told the story of how baby Jesus was born—some children played Mary the mother or Joseph the father, but I was a little sheep.

### **Around the janitors' quarters**

Around the janitors' quarters, my grandfather and grandmother lived in a janitor’s dormitory in the experimental forest just a short walk from Nanagokan, so when my mother told us to go outside and play, my brother and I would head over there. Most of the plants had name tags, each with three names: one in Japanese, one in English, and one that looked like English but wasn’t. I asked my father about it. He told me it was a special name used for flowers and trees, so that people all over the world could use the same word when talking about the same plant. It’s written in Latin, he said—for example, the flower called white clover is known as *Trifolium repens*. Everything has two or more names...

Grandpa took my brother and me on rides in his cart, and we explored the woods, where he taught us how to eat mulberries, loquats, and figs by pulling them from the trees. My favorite was the quince (Chinese quince. *Pseudocydonia sinensis*), which looked like a large pear, yellowish green or yellow, and had a smooth skin. It has a sweet fragrance like a flower, but it is so tough that you

cannot eat it as it is, so you hold it in your hands and put your face in it to enjoy just the smell. Grandpa would suddenly start imitating bird calls—"Dada-poppo, dada-poppo!"—and it would startle me so much that I often dropped the quince I was holding right onto the ground. The cat that followed us would be startled and run away.

Grandma finally had time to study, so she got a cooking license and started working in the student cafeteria. My brother and I would sometimes eat her orange spaghetti or fried white fish for lunch. From that time on, Grandma, with her silver hair, white triangular hood, and cape, began to travel around the "world" on her own, joining tours called "LOOK." Before she left, she always brought out a globe to talk with me and asked what I wanted as a "souvenir," but I didn't really understand what a souvenir was, so I always begged her, "I want a treasure—find me a treasure!"

Grandma finally had time to study, so she got a cooking license and started working in the student cafeteria. My brother and I would sometimes eat her orange spaghetti or fried white fish for lunch. From that time on, Grandma, with her silver hair, white triangular hood, and cape, began to travel around the "world" on her own, participating in tours called "LOOK". Before she left, she always brought a globe to talk to me and asked me what I wanted as a "souvenir," but I didn't really understand what a "souvenir" was, so I always begged her, "I want a treasure, find me a treasure!"

When Grandma went to Australia, she brought me back a stuffed kangaroo and a koala. When I turned the screws attached to the kangaroo's hips, the music box inside would play a song called "Waltzing Matilda," and I loved to march around with the kangaroo in my arms to the rhythm of the music. Among the many postcards she sent, there was one with a very large red rock that looked like a big mountain. When I gazed at it, I felt a strange kind of sadness, as if I were angry about something. Maybe something terribly painful had happened to the people who lived there. That same feeling came to me when I looked at the bright blue wings of the Morpho butterflies that Grandma had brought back from Brazil—Dad told me their name and where they came from.

### **The Morpho Butterfly Speaks**

We do not fly very far.  
We live deep in the forest,  
fluttering high among the trees and between their branches.

We do not fly very far.  
We patrol the edges—fields, rivers,  
then return again to the forest.

We do not fly very far.  
As babies, we fed on leaves,  
and as adults, we sip the juice of rotting fruit and dead animals.

We only look blue—we are not blue.  
Tiny scales on our wings  
catch the light and cast a small enchantment.

We are not blue.  
When we drink the juice of rotten guavas, we land on the ground,  
fold our wings, and fade into brown.

We are blue.  
When children catch us and pin us  
to boards with nails, our wings shine the brightest.

We do not fly very far.  
When we die,  
tiny creatures come and eat us down to size.

We do not fly very far.  
When we die,  
ants and flies feed on our bodies and nourish the earth.

We do not fly very far.  
Our broken-down bits return to the soil,  
helping to nourish something new.

To our dear companions across the sea,  
until the day your bodies find their resting place,  
speak to the little ones with your shining wings.

## Ruth and Bruce

Unya, let me say it one more time.

Okay, déjame decirlo otra vez.<sup>8</sup>

When I was five years old, I was drinking freshly squeezed milk from a big brown cup.

Pag-lima ka tuig ko, nag-inom ko ug bag-ong gatas gikan sa dakong brown nga tasa.

At our house on the corner of Nanagokan, my father's American friends often came to visit. They were sometimes “missionaries,” sometimes “researchers,” and sometimes just men—but sometimes they were couples. Some spoke a little Japanese, some not at all, but all spoke English in the same way: like the world of *Sesame Street*, the world of *Tokyo Children's Club* records, or the world of a teacher who grew up abroad, reading my writing to me at kindergarten. Even though it was my first time meeting them, something about the way they spoke—the gentle flutter of their words—made me feel warm inside.

My father chatted happily in English, while my mother, who didn't speak the language, moved in and out of the room—half in, half out—offering food and drinks, looking a little uneasy but smiling all the while. She had told me that children shouldn't interrupt adult conversations, so I tried to stay quiet in the playroom next to the living room, unless someone called me. But my father and his friends would say, “Alice, come here. Don't be shy. Shall we sing a song? Can you sing a song?” So I would step in, shyly, and when I sang *Puff the Magic Dragon* or *You Are My Sunshine*, everyone would sing along with me. My heart beat fast with excitement.

Among the “missionaries” were those who were also “researchers,” and Bruce was one of them. He told me that he was studying plants and soil at a university in Hawaii. He's learning how to grow plants well, how to grow food safely, and so on. He's teaching things that are useful not only in Hawaii but also in other warm places, helping people live healthy and happy lives. I'm from California, but I also study with students from the Philippines and “Okinawa.” I have a girlfriend named Ruth from the Philippines, who's back in her hometown, Cebu, for the university vacations.

Where is the Philippines? If you take a globe, you'll see—oh, here is the Earth. Here's a place called California in the United States; it's on the west side of the Earth. And here is Hawaii. If you cross the ocean by boat or plane from California, you'll arrive here. Hawaii is to the left of

---

<sup>8</sup> Spanish.

California, in the west, in the ocean. And here is Japan—on the other side of California, to the east on this globe. These little islands here are “Okinawa,” the southernmost part of Japan. And further south, here is the Philippines, with so many islands—and right in the middle is Ruth’s hometown, Cebu.

It made me feel a little confused.

I asked Bruce, “Is Japan on the east side of the globe?” and he said, “Yes. You see, when you look at it from the mainland U.S.A., it’s on the far right side of the globe—in other words, in the east.”

Bruce said it was a souvenir from the Philippines. He told me he bought it at a shop Ruth had taken him to, and that the shells were beautiful because they had once been used in the windows of old buildings. He left the chandelier at our house—it was made of Capiz shells. (Capiz shell—my dad told me that’s what they call the windowpane oyster, *Placuna placenta*, after he looked it up.) The shells were very thin and light, like little round pieces of paper, stacked on top of each other. Their surface was smooth and white, but not just one kind of white—more like bits of cloud, with different shades of white mixed in, making me feel like I could float up into the air. I watched the chandelier as it hung from the clothesline on the porch, swaying gently, catching the sunlight and glowing with a soft, beautiful light. I couldn’t stop looking at it.